

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第778号 平成26年7月31日

ストーカーは何を考えている（2）

人は何故、ストーカーになってしまうのでしょうか。

世の中には、「振った」「振られた」という話しは数限りなくありますが、「振られた」からといってストーカーになるような人は殆どおりません。それは、ストーカーになったとしても、問題は何も解決しない事を分かっているからだと思います。

正常な感覚の持ち主であれば、ストーカー行為に時間とお金を掛ける事と、その事による結果との損得勘定は直ぐにでも出来るはずで、ストーカーというばかげた行為に走るような事はしません。だからこそ、ストーカーの異常さが際立つのだと思います。

7月11日にNHKが放送した「ストーカー 殺意の深層」は、ストーカーの加害者と直接対峙し、徹底取材した報告で、ご覧になった方は衝撃を受けたのではないのでしょうか。

ストーカーの問題というと、被害者側の方に目が行きがちですが、NHKの番組は、ストーカーの内面に直接向き合おうとしたもので、画期的だと思います。NHKがそうした視点で番組を作ろうとしたのは、平成24年に神奈川県逗子市で起きたストーカー殺人事件の被害者、三好梨絵さん（当時33歳）の兄の「既存の規制や取締りの強化だけでは悲劇を防ぐことは難しく、被害者を守るためには、加害者と向き合うしかない」という問題提起に触発されたためだったようです。

「ストーカー 殺意の深層」の取材の現場になったのは、1999年（平成11年）からストーカー被害の相談に取り組んで来たNPO法人「ヒューマニティ」で、番組を通してストーカーの生の声を聞くと、彼等もまた、出口のない闇の中を彷徨っているのではないかと強く感じられてなりません。そして、そうであれば、ストーカーというのは、被害者はもとより加害者にとっても全く救いのない悲劇だといわざるを得ません。

NPO法人「ヒューマニティ」の理事長をされている小早川明子氏もまた、逗子の事件の遺族と同様に加害者の心の内面に迫る必要性を痛感して来たといえます。彼女は最近、これまでストーカーの加害者とも深く係わって来た体験を踏まえ、『「ストーカー」は何を考えているか』という本を上梓されていますので、以下、それを基にしながらストーカー問題を考えてみたいと思います。

小早川氏は、ストーキングはセクハラやパワハラと違い「自分の正当性、特定の

相手に対する強烈な思いと怨念にも似た感情」があると述べると共に、これまで1500件を超えるストーカー事案と係わる中で、ストーカーには以下の3点が共通して見られるとしています。

- 確固たる心理的動機があり、正当性を妄想的に信じ込んでいる
- 相手を一方向的に追いつめ、迷惑をかけて苦しめていることを自覚しながらも、相手に好意を持たれる望みをかけている。
- その望みが絶たれた時、心のバランスは憎しみに反転し、自殺または相手を殺害することもある

つまり、ストーカー自身にも被害者意識があるという事で、この加害・被害意識の混在した曖昧さがストーカー問題をより深刻にしているといえるでしょう。

(塾頭：吉田 洋一)